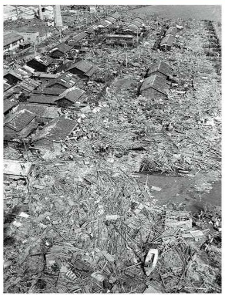
備える 3.11から　第167回　特別編　伊勢湾台風60年のつどい

記憶と教訓 次世代に

二十六日に被災から六十年を迎える伊勢湾台風。東海地方を中心に、五千九十八人の死者・不明者を出した大災害の記憶と教訓を、次の世代にどう引き継ぐかが課題となっている。八月四日に開かれた「伊勢湾台風60年のつどい」（愛知県、名古屋市主催）では、子どもたちが当時の被災者から話を聞き、記事にまとめる「防災新聞をつくろう！」が催された。つどいでは追悼式と「川のある街―伊勢湾台風物語」の著者で名古屋市出身の清水義範さんの講演もあった。「備える」では、特別編として参加者の声などを紹介する。

加古美恵子さん㊨の体験を聞く子どもたち＝いずれも名古屋市東区のウィルあいちで



高潮で壊滅した愛知県半田市の被災地＝1959年９月、本社機「新鷹」から

自分の力だけでは…実感

60年前、実際に被災した作家は何を感じたのか。清水義範さんが講演で当時を振り返った。

作家・清水義範さん 講演

あのころは名古屋市西区の庄内通の近くに住んでいた。夜７時ごろに停電になり、テレビからの情報もない。風がゴウゴウと強くなる。真っ正面から風が当たり、錯覚かもしれないが、庭に面したガラス戸の雨戸がしなっているように見えるほどだ。家族全員で２時間ほど必死に雨戸を押さえた。近くのどの家もそうだった。

明くる日。西区の庄内川は堤防が決壊せず、被害は比較的小さかった。でも、南区はとんでもない被害。堤防が決壊し、家を建てるために港に置かれていたラワン材が家々を直撃した。そこから数カ月は水浸しのままだった。それが翌日まで全く分からなかった。情報が伝わる遅さは今とは比べものにならなかった。

そんな状況の中、人々は自分の力だけでは生きられないと実感した。

戦後最大の災害を経験し、大学生たちがボランティアとして動きだした。それが阪神大震災が起きた際の経験につながっている。

家族で唯一生き残る

加古美恵子さん（69）
名古屋市南区

小学四年だった私の下に妹が三人と両親の六人家族で、私を除く五人が亡くなった。

名古屋市南区にあった自宅に水が入ってきて、立っていることも座っていることもできなくなった。避難しようと家族六人抱き合って家を出たとたんにふわっと体が浮いて、大きな洗濯機の中にいるように水の中を引き回された。その時に妹とつないでいた手を離してしまった。

流れが少し緩やかになったところで、流木につかまっていたらトラックのヘッドライトが見え、引き上げてもらった。トラックの上で時間を過ごしていると、ふっと頭上の雲が切れた。台風の目。空高くきれいな月が浮かんでいた。

生き残った私は幸運だった。「もうだめだ」と諦めたら幸運はやってこない。災害時には強い気持ちで、どうやって助かろうか考えてほしい。

治水の重要性を痛感

小島篤雄さん（87）
名古屋市港区

六十年前も名古屋市港区の南陽地区に暮らし、ノリの養殖をしていた。漁師にとって船は財産。台風に備えて近くの入り江につないでいた。

午後七時ごろ船を見に行ったら、堤防から手が洗えるほど増水していて、鬼門の北東からの風が強くて体が吹っ飛ぶぐらい。帰宅後の同八時半ごろには、弟が「水が入ってきた」と叫び、きょうだい四人と両親全員で二階に上がった。

風が激しくなり、家がぶらんこに乗っとるくらい揺れ、このままペシャンといくかと思った。裏から「おーい助けて」という声が聞こえ、ロープを流してあげた。自分たちもばらけないよう七人の体を一本のロープでしばり、約三十分間は生死の境にいたと思う。周囲には一家全滅のところもあり、多くの人が犠牲に。千年安全と思える治水対策や家が必要と痛感する災害だった。

家の周りがまるで海

山口喜代美さん（74）
愛知県弥富市

翌日に運動会を控え、朝から練習していた。午前十一時すぎに警報が出て一斉下校になった。愛知県十四山村（現弥富市）の自宅では、午後八時を過ぎるとすごい雨と風。「ドスーン、ガシャーン」と屋根瓦が飛んだり、大きな物がぶつかったりする音がした。避難した二階から下をのぞくと、天井の一㍍下くらいまで水が来ていた。

母は仏壇にお祈りし、家族はみんな早く台風が過ぎてほしいとじっと座っていた。少し風がやんだので窓から外を見ると、田んぼには水が入って海上にいるようだった。明け方に自宅から二百㍍ほどの家が「ゴー」という音を立てて水の中に沈んでいった。

同級生の家族ら、近所で亡くなった人もいた。幸い、うちの家族は亡くなったり、家が流されたりしなかった。良かったと思う半面、皆さんに申し訳ないような複雑な気持ちだった。

船に乗り自宅を見に

青木八束さん（82）
愛知県春日井市

当時は岐阜大の四年生。午後五時すぎに新岐阜駅から名鉄の特急に乗った時は快晴の真っ青な空だった。ところが新名古屋駅で運休になり、ＪＲ蟹江駅から名古屋市中川区の木造平屋の自宅まで二㌔ほど、風速三五㍍の風と雨の中、びしょぬれで帰った。

風はどんどん強まり、雨戸の内側から直径七㌢の太い丸太で支えた。午後八時ごろに風は収まったが、裏に海水が流れてきて、家族三人と避難することに。たんすの引き出しを屋根裏に上げて逃げた。

翌朝は台風一過の秋晴れ。でも周りは海の一部になっていた。近所の人の船に乗って自宅を見に行ったら、床上三十㌢まで浸水。堤防を補修するまで約一カ月間、避難所や支援所を船で往来する生活が続いた。

台風も地震も自然が相手だから逆らえないが、知恵を絞って被害を少なくする備えをしてほしい。

家族との再会 泣いた

布目勝利さん（76）
名古屋市熱田区

あの日、高一だった私は、両親と妹と名古屋市熱田区の自宅にいた。午後八時すぎから風が強まり、上がり口のガラス戸を押さえていたら水が流れ込んできた。学業の道具をかばんに詰めて父と逃げた。

百㍍ほど先の熱田高校を目指したが、濁流でとても立っていられない。辺りは真っ暗。切れた電線から閃光が走っていた。ダンプカーの荷台に逃げ込んだが、転覆しそうだと濁流に飛び込んだところ、水は胸ぐらの辺りまで。電信柱にしがみつき、これで手を離したらあの世だなと思った。

おやじが背中から覆いかぶさってくれたが、流されないように支えてくれたんだと今になって思う。別々に避難したおふくろと妹と高校で会えた時は、辺りをはばかることなく泣いた。

あの台風からは、事前に情報を把握し、余裕を持って地域の人と避難する大切さを学んだ。

信用できる情報 大切

西川和之さん（78）
名古屋市熱田区

夜になってから急に雨がひどくなった。当時住んでいたのは名古屋市熱田区千年。土地が低く、雨が降るとすぐに浸水した。たいてい床下までだったが、その時はどんどん水かさが上がって、あっという間に高校三年生だった私の腰の辺りまで来た。家の壁が崩れ、屋根瓦も飛んでいった。

小学生の弟を背負って避難しようとしたが、バス通りに決壊した堀川の水が流れ込んできて、新幹線より速いんじゃないかという流れになっていた。バス通りは横切れないし、家にも帰れない。近くの風呂屋の二階で一晩を過ごし、翌日に避難所の学校へ行けた。

被災体験を進んで話そうとは思わない。記憶はどんどん薄れていくし、思い出したくない面もある。子どもたちには、信用できる情報を確実に手に入れてほしい。「周りが言っているからそうだ」と思い込まないことが大事だ。

生の体験談に説得力

名古屋市東区、砂田橋小５年伊東新之助君（10）　避難の際の状況を細かく教えてくれた。僕が当時の現場にいたら、生きるすべがなかったのではと思う。大量の水に流れてくるがれきや柱しか残らない家屋の話を聞き、水害の恐ろしさを改めて知った。体験談を子どもたちに伝えることは大事だと思う。本や図鑑で調べたことよりも、インタビューで聞けた話はとても説得力がある。学校の防災新聞づくりに生かしたい。つらい体験を将来の世代のためにと、頑張って話してもらったことにとても感謝している。

備えと情報確認 大事

愛知県春日井市、椙山女学園大付属小４年深見奈希（なつき）さん（10）　伊勢湾台風については、おばあちゃんから「大変な災害で、怖かった」と少し聞いていた。今回お話をされた布目さんは、家から避難する時に、濁流の中で電信柱につかまりながら「手を離したら終わり」と感じていたと聞いた。そんな思いをされ、命懸けで生き延びられたと知り「すごいなあ、私だったら怖くて逃げられたかな」と思った。これからはライフジャケットの用意を含めて台風に備え、災害時は早めに避難できるように情報を確認したい。

自分の命 自分で守る

愛知県武豊町、武豊小４年東根歩君（９）　「伊勢湾台風」という言葉は聞いたことがあったが、実際にどういう被害があったのかは知らなかった。自宅が２㍍くらい浸水したという被災した方の話を聞いて、普通の台風とは全然違う怖いものだったと感じた。避難所の生活では、トイレに行くことさえも難しかったというのが本当に大変だったと思う。

自分の命は自分で守れるように、台風が近づいたらニュースなどでしっかり情報を集めて、逃げやすいように部屋の荷物の置き方も工夫してみたい。

「自分だったら」想像

三重県桑名市、光風中１年鷲野礼佳さん（12）　語り部の方が「本当は話したくない」と言っていたのが印象的だった。私たちのために勇気を持って話してくれたと思う。避難後の過ごし方を聞き「私自身だったら」と想像してみた。狭い場所に知らない人たちがたくさんいて、寝たり着替えたりするのは精神的な苦痛が大きい。あわてんぼうの私は焦って落ち着けないとも思った。災害時には警報をはじめテレビやインターネットなどで多くの情報があふれるが、避難に必要な情報を冷静に取り入れ、命を守るために生かしたい。

「備える」は毎月第一月曜日に掲載予定。次回は十月七日です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています